

臣奥村氏支族の第十四代。直温の嫡男。嘉永五年十月廿四日出生。初名福松、後左京。元治元年七月四日遺知一萬二千石(内二千石與力知)を受け、明治二年四月廿七日享年十八を以て歿した。法號秀嶽院、野田山に葬る。

オクムラアツノブ 奥村惇叙 加賀藩の老臣奥村氏支家の第十二代。實直の嫡男。享和二年十一月廿二日出生。初名磯吉。後内膳。初諱從宜。文化十四年八月六日實直の遺領一萬石(内千五百石與力知)を賜ひ、文政四年十二月廿二日兵部久房の遺領を加へ、知行一萬二千石(内二千石與力知)となつた。弘化三年九月廿七日享年四十五を以て歿。法號良徳院、義山道知居士、野田山に葬られた。

オクムラアリサダ 奥村有定 加賀藩の老臣奥村氏支家の第七代。實は支家奥村丹波守惠輝の七男。元禄十年出生。幼名小膳、後華人。内匠。初諱定賢。享保九年八月有輝に養はれ、十年九月四日新知二千五百石(内五百石與力知)を賜ひ、十六年四月二日養父の遺領一萬五千石(内千五百石與力知)を襲ぎ、前領は之を除かれ、元文二年二月廿六日江戸に歿した。享年四十。法號靈機院、野田山に歸葬した。

オクムラアリテ 奥村有輝 加賀藩の老臣奥村氏支家の第十代。時成の三男。延寶七年出生。母は横山忠次の女。幼名平次郎、後伊豫。元禄六年二月十六日父の遺領一萬四千五百石(内千石與力知)を賜はり、弟彌四郎自遜は幼なるを以て、追つて遺領の内本高の外免の餘分を以て知行を命ぜらるべく、その時に至るまで遺領高免の分は舊の如く與へられたが、十四年七月四日餘免高二千五百七十七

斗の内五百石を有輝の與力知に加へ、都合一萬五千石(内千五百石與力知)とし、殘二千七百七斗に四百九十二石三斗を引足して、都合二千五百石(内五百石與力知)を自遜の知行に配分せられた。次いで正徳元年十二月廿七日從五位下伊豫守に叙任し、享保十五年十二月五日五十二歳を以て卒した。法號德惠院、野田山に葬られた。

オクムラウチ 奥村氏 (一)世系—加賀藩臣の中門閥八家の一つで、永福・榮明・榮政・榮清・時成・有輝・有定・修古・榮隆・尙寛・榮實・榮親・榮通・榮滋十四代相傳へ、その祿少きときは一萬三千石(内千石與力知)から、多い時は一萬七千石(内千五百石與力知)に及んだ。榮滋の時明治維新に際し、三十三年五月特に華族に列し、男爵を授けられた。奥村氏の宗家である。

(二)邸第—奥村氏宗家の屋敷は、石引町の入口東側であつたが、この地は延寶の地圖に奥村伊豫守下屋敷と記されるもので、元禄九年伊豫守有輝の時、命により今の兼六園内からこゝに移つたのである。

オクムラウチ 奥村氏 (一)世系—加賀藩臣門閥八家の一つで、奥村永福の二子易英に初り、和忠・庸禮・惠輝・明敬・温良・保命・易直・熙展・成象・隆振・實直・惇叙・直温・篤輝・則友に互るが、和忠は世代の數に入らぬから十五代を數へ、祿多き時は一萬七千四百五十石(内千石與力知)から、少き時は六千石(内千石與力知)に至る。則友の時廢藩に會し、その養嗣子則英は明治三十三年特に華族に列し、男爵を授けられた。奥村氏の支家である。

(二)邸第—奥村氏支家の屋敷は、元祖因幡易

英の頃には金澤城内新丸に居たが、後には新堂形米倉の隣地小將町に在つた。城内から臣僚の邸を移轉せしめられたときに變じたのであらう。

オクムラウネメ 奥村采女 彌左衛門の子。若名かな。前田利家に仕へ、祿五千石。天正十二年十五歳の時末森城を守り、慶長五年八月三日大聖寺陣に討死した。享年三十一。

オクムラカイシン 奥村快心 ↓オクムラナガトミ 奥村永福。

オクムラカズタダ 奥村和忠 加賀藩の老臣奥村氏支家の第二代。易英の嫡子。慶長八年三月廿七日金澤に生まれた。通稱主殿、初諱榮之。元和二年前田利常に仕へて千石を領したが、寛永十六年十月廿七日父に先だつて京都に歿した。享年三十七。法號雲雲院、後尊行院。享年三十七歳。

オクムラカタナホ 奥村質直 加賀藩の老臣奥村氏支家の第十一代。隆振の三男。明和四年出生。通稱伊助。左京。初諱正直。天明五年父隆振能登島に配流せられたから、十二月廿六日祖父成象の遺領一萬石の内六千石(内千石與力知)を賜ひ、寛政七年九月十五日家柄に依つて四千石(内五百石與力知)を加へられ、都合一萬石(内千五百石與力知)となり、文化十四年六月八日享年五十一を以て歿した。法號元良齋子義賢忠居士、野田山に葬られた。

オクムラゲンザエモン 奥村源左衛門 源左衛門長元の次子。前田利常に召出され、光高に屬して祿四百石を受け、寛永十九年兄の死するに及んで百石を加へ、慶安三年父の遺知中三千二百石(内二百石與力知)を襲ぎ、寛

文三年足輕三十人を附して越中魚津に遣はされたが、天和二年病によつて役儀を免せられ、貞享九年三月歿した。

オクムララジエモン 奥村治右衛門 荒子七人衆の一人。後前田利長越中守山に於いて自ら之を殺害し、家断絶した。

オクムラスケカズ 奥村脩運 通稱長三郎。源左衛門。字は子復、天遊と號した。寛文十一年十一月生まれ、元禄六年八月家秩二千七百石を嗣ぎ、正徳元年三月公事場奉行となり、享保十四年八月病に依つて之を辭し、十八年七月廿四日六十四歳を以て歿した。脩運學を好み、牧野養潛・室鳩巢に學び、室門七才の一人を以て稱せられた。

オクムラスケロク 奥村助六 大聖寺藩士。風傳流の槍術を中山源兵衛吉成に受けて、この藩に於ける同流の祖となつた。

オクムラセイケイフ 奥村正系譜 一册。奥村永福家の系譜で、原本はもと家臣河崎氏の所蔵であつたが、森山平次之を謄寫して秘笈叢書に收めた。

オクムラタカオキ 奥村隆振 加賀藩の老臣奥村氏支家の第十代。實は横山大和守貴林の五男。享保十九年出生。幼名山三郎。後左京。主水。成象の末期養子となり、寛延二年六月三日遺領一萬石(内二千石與力知)を受け、安永七年四月廿八日二千石を加増せられて一萬二千石となつたが、天明五年九月廿九日逼塞を命ぜられ、且つ知行二千石を除かれ、十一月廿九日流刑の宣告を得、翌年正月廿八日能登島向田に送られ二十五人扶持を受けた。これは隆振が權威に倚藉し、一族中の子弟にして狂暴なる爲禁錮せられてゐた者を、恣に